

シリーズ
奥多摩の野鳥

第110号 (7月号) 毎月発行



**奥多摩を
歩こう!**



■コムクドリ

Vol.108



漢字名：小椋鳥 レア度★★★★
スズメ目/ムクドリ科

- **大きさ** 全長19cm
- **なき声** 「ピキュ キュキュキュ キュルル」
- **特徴** 雄は頭部が白く、耳羽の下に茶色の斑がある。背から翼にかけて光沢のある紺色、黒色となる。雌は頭部から背にかけて灰褐色。



メ モ 市街地や林に生息している。雑食性で、おもに草木の実や種子、昆虫類を採食している。

H どこで観察できる？

国内：夏鳥。平地から山地の林。繁殖期以外は群れで過ごすことが多い。
奥多摩：夏鳥。4～5月に平地で見られる。山地での目撃は稀。

★沢・窪・谷のススメ



東京都 奥多摩ビジターセンター

URL : <https://www.tokyo-park.or.jp/nature/okutama/index.html>

住所：東京都西多摩郡奥多摩町氷川171-1

電話：0428-83-2037



公益財団法人 東京都公園協会

お客様サポートセンター (協会の事業全般に関するお問い合わせ)
電話：03-3232-3038 ※8:30～17:30 (土日・祝日・年末年始を除く)

★雑学コーナー

名前から読み解く沢の利用法

奥多摩町では江戸時代以前より、沢が人の暮らしにとって身近な存在でした。そのため、生活圏内にある沢・窪・谷などには、それぞれの利用に則した名前がつけられている事例が多くあります。

ここでは、沢の名に含まれるフレーズから、その場所の利用法を覗いてみましょう。

● **サス沢の「サス」、赤杭沢の「杭」**

サス・杭とは、焼畑をしていた場所のことで、土地を焼いてできた灰を作物の肥料として利用していました。焼き畑は昭和時代まで行われており、奥多摩ではよく聞く地名のフレーズです。

● **海沢の「海」**

内陸に海?と疑問に思うかもしれませんが、大きな池があった場所には「海」の字がつくことがあります。海沢集落あたりにはその昔、池沼があったといわれています。

● **日陰名栗沢の「名栗」**

名栗は木こりが伐った木材を落として運ぶ場所をさします。埼玉県にも同じ地名が残っています。

都民を潤す奥多摩の沢

山梨県の丹波川から、奥多摩湖を経て、奥多摩町内を流れる多摩川は、東京都民の暮らしに欠かせない水源のひとつです。多摩川には、多くの支流があり、特に奥多摩ビジターセンター付近で合流する日原川は代表的な多摩川の支流です。町内には、毛細血管のように、多くの沢や支流が存在しており、それら一つひとつに「〇〇沢・窪・谷」といった名前がつけられています。



多摩川と日原川
合流地点

山よりも身近だった沢の存在

奥多摩の山域には、「〇〇ノ峰」や「〇〇沢山」という名前の山が多くあります。これらの山名は、どれも沢の名前が由来となっています。江戸時代以前の奥多摩の人々は、ワサビを栽培し、川魚を釣り、狩猟で獣をとっていたため、暮らしの中で谷や沢は欠かせない存在でした。反対に、山頂には用がなかったため、山の名前の多くは、明治時代以降に沢の名からつけられました。

◇沢由来の山名の例◇

- ・雲取谷 → 雲取山
- ・酉谷 → 酉谷山
- ・日陰名栗沢 → 日陰名栗山
- ・日向沢 → 日向沢ノ峰
- ・サス沢 → サス沢山
- ・ヌカザス沢 → ヌカザス山

※山名の由来は諸説あります。

代表的な多摩川の支流と沢

ここでは奥多摩町内の名前の付いた沢の一部と登山道から沢の風景を楽しめる場所を3つ紹介します。
※詳しい行き方は奥多摩ビジターセンターへお問い合わせください。



川乗谷

日原川支流

沢沿いを歩けば、百尋ノ滝や谷、沢の風景を楽しむことができます。



沢の様子

百尋ノ滝

奥多摩 ビジターセンター

楊寄沢

多摩川支流

沢沿いの登山道を歩くと楊寄ノ大滝やゴハンギョウの滝を眺めることができます。



沢の様子



楊寄ノ大滝

● 沢沿いの注意点

降水量が多いと増水し登山道が水没し通れなくなることがあります。また、雨水と共に土砂が流れだし崩落することや、鉄砲水が発生し沢の流れが濁流に変わる危険性もあります。天候が悪化し、雨足が強くなる場合は無理をせず、登山を中止し下山しましょう。

海沢

多摩川支流

沢沿いの登山道を歩くことで三ツ釜の滝、ネジレの滝、大滝の3つの滝を巡ることができます。



沢の様子

三ツ釜の滝

ネジレの滝

大滝